

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 23 日現在

機関番号：33904

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2015

課題番号：25780432

研究課題名(和文) パラノイアにおける潜在・顕在的認知についての実証的研究

研究課題名(英文) Empirical studies on implicit and explicit cognition in paranoia

## 研究代表者

津田 恭充 (TSUDA, HISAMITSU)

愛知学泉大学・家政学部・講師

研究者番号：80635665

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：パラノイアの生起メカニズムを自尊心の観点から説明する2つのモデルが提唱されている。ひとつは、潜在的に低い自尊心が顕在化することに対する防衛としてパラノイアが生じるとするものである。これによれば、潜在的に自尊心が低くとも、パラノイア(誰かに陥れられた。私は悪くない)を抱くことで顕在的には自尊心は保護される。もうひとつのモデルは、パラノイアには防衛的な側面はなく、低い顕在的自尊心を直接反映していると仮定するものである。本研究では、質問紙調査および認知実験によってこれらのモデルの検討を行った。その結果、いずれの分析でも後者のモデルが支持された。

研究成果の概要(英文)：Two hypotheses on the formation of paranoia have been proposed. One views paranoia as a defense against underlying self-esteem reaching consciousness. This model suggests people with low implicit self-esteem protect explicit self-esteem by developing paranoia. The other considers paranoia as a direct reflection of low explicit self-esteem rather than a defensive function. This study examined above two models by cognitive experiments and questionnaire surveys. As a result, the direct reflection model was supported in all analysis.

研究分野：臨床心理学

キーワード：パラノイア 自尊心 潜在的認知

### 1. 研究開始当初の背景

近年、実験的手法の発展によって、社会心理学や認知心理学の領域では、潜在的(非意識的)な心理変数を考慮した研究が盛んになされている。この影響は臨床心理学にも波及しており、かつては客観性の高い研究が困難であった、潜在的な心理プロセスを仮定した理論について、実証的な検討が加えられている。本研究では、以上の流れを踏まえて、パラノイアのメカニズムについて、顕在的認知のみならず、潜在的認知の観点からも検討を行うこととした。パラノイアは不安や抑うつとともに身近な精神症状であり、そのメカニズムを解明できれば、予防法や治療法の開発にも貢献が期待できる。

### 2. 研究の目的

本研究の主な目的は、パラノイアの生起に関する以下の2つの有力視されているモデルのうちのいずれが支持されるのかを明らかにすることである。ひとつは、パラノイアを自尊心保護という観点から説明するもので、それによると、パラノイアをもつ個人は、潜在的にネガティブな自己表象をもつ(潜在的自尊心が低い)とされる。低い潜在的自尊心は、ネガティブな出来事(例:大事な仕事で失敗した)によって活性化される。これは顕在的自尊心の低下につながるが、パラノイア(例:誰かが私を陥れたから失敗したのだ)を抱くことで顕在的自尊心は傷つかずに済むというわけである。これによれば、潜在的自尊心とパラノイアには負の相関があることが予測される。もうひとつのモデルは、パラノイアにみられるネガティブな主題や感情は、低い顕在的自尊心を単純にそのまま反映したものであると仮定するものである。これによれば、顕在的自尊心とパラノイアには負の相関が予測される。また、このモデルではパラノイアの発生に潜在的プロセスを仮定していないため、潜在的自尊心はパラノイアとは無関係であると考えられる。

関連する先行研究では、潜在的自尊心の測定に潜在連合テストのみを用いることがほとんどであるが、本研究は潜在連合テスト以外にもネームレターテスト(イニシャル選好課題)を複合的に用いる。というのも、潜在的自尊心の測定方法間の相関は低く、それぞれ潜在的自尊心の別の側面を測定している可能性が考えられるためである。こうした方法をとることで、潜在的自尊心をより幅広くとらえることを目指した。

前述したように、潜在的自尊心を測定するためには、潜在連合テストとネームレターテストを用いるが、潜在的自尊心の指標であるネームレター効果はさまざまなバイアスを受ける。そこで、ネームレター効果を算出するための最適な方法の探索を行うことも目的とした。また、曖昧さへの態度とパラノイアの関連、潜在レベルのパラノイアと顕在レベルのパラノイアの関連なども検討し、パラ

ノイアの様相やメカニズムを、顕在的側面と潜在的側面の両面からさまざまな方法で明らかにすることを目的とした。

図: 検討する2つのモデルの概要

パラノイアは低い潜在的自尊心の顕在化を防ぎ、顕在的自尊心を保護する。



パラノイアにおけるネガティブな主題や感情は、低い顕在的自尊心を直接反映している。潜在的プロセスは関係ない。

### 3. 研究の方法

(1) 潜在的自尊心の指標としてのネームレター効果の算出法について

A~Zのアルファベットの好みを7件法で尋ねた(ネームレターテスト)。自身のイニシャルの得点が非イニシャルの得点よりも高いほど、また、自身のイニシャルの得点はそのアルファベットを含まない人のそのアルファベットに対する平均得点よりも高いほど、潜在的自尊心が高いことを意味する。ただし、「A」は高い評価を意味するため、それをイニシャルに持たない人にも一般的に好まれやすいなど、アルファベットの評価にはさまざまなバイアスがかかるため、実際のネームレター効果の算出にはこうしたバイアスを考慮した分析が必要になる。そこで、3つの代表的な算出法を比較し、いずれの算出法が適切なのかを検討した。

(2) 曖昧さへの態度とパラノイアの関連について

古くから曖昧さへの態度とパラノイアの関連が指摘されているが、今までの研究では「曖昧さに不安を感じる」といった曖昧さへのネガティブな態度のみが注目されていた。しかし、曖昧さを楽しむなどの曖昧さに対するポジティブな態度も実際には存在する。曖昧さに対するポジティブな態度が問題なのか、ネガティブな態度が問題なのか、それともその両方なのかを明らかにするために、西村(2007)の尺度を用いて、「曖昧さの享受」「曖昧さの受容」「曖昧さへの不安」「曖昧さの統制」「曖昧さの排除」という、曖昧さへの5つの曖昧さへの態度を測定し、パラノイアの関連を調べた。

(3) 潜在的パラノイアの測定について

今までのパラノイアの指標は質問紙で測定する顕在指標が主体であった。そこで、新たに潜在連合テストを用いた潜在的パラノイアの測定を試みた。そして、質問紙で測定されるパラノイア(顕在的パラノイア)や、潜在的自尊心および顕在的自尊心との関連を調査した。

(4) パラノイアの生起に関わる2つのモデルについて

前述した2つのモデルの検証を行うため、非臨床群を対象としたアナログ研究を行った。具体的には、ネームレターテストや潜在連合テストによって潜在的自尊心を測定し、ローゼンバーグの自尊心尺度によって顕在的自尊心を測定した。また、自尊心尺度の評定値に影響を与えると考えられる謙遜傾向を測定した。それと同時にベック抑うつ検査によって抑うつも測定した。これらとパラノイアの関連を調べた。

#### 4. 研究成果

(1) 潜在的自尊心の指標としてのネームレター効果の算出法について

LeBel & Gawronski (2009)で挙げられている5つの算出法のうち、簡便なために頻りに用いられているS-algorithmとB-algorithm、これらの欠点を改良したI-algorithmを比較した。その結果、I-algorithmには本研究で問題視した欠点がみられなかった。先行研究でも別の観点からI-algorithmが推奨されており、ネームレター効果の算出にはI-algorithmの利用が最適だということがわかった。

(2) 曖昧さへの態度とパラノイアの関連について

曖昧な事態に対して不安を覚える「曖昧さへの不安」や、情報収集などによって曖昧さを統制しようとする「曖昧さの統制」がパラノイアと関連していることがわかった。これは、情報が不足した状況での情報収集がパラノイアに関与しているという応募者の先行研究と一致する結果であった。

(3) 潜在的パラノイアの測定について

潜在連合テストを用いた潜在的パラノイアの測定を行い、顕在的パラノイア(質問紙などで測定される一般的なパラノイア)や潜在的自尊心および顕在的自尊心との関連を調査した。その結果、潜在的パラノイアと顕在的パラノイアには相関がなかった。一般に、潜在指標と顕在指標には相関がみられにくいことがよく知られているが、本研究も同様の結果となった。一方、自尊心との相関では、潜在的自尊心と潜在的パラノイアの間には有意な正の相関がみられた。このことは、自尊心とパラノイアはスキーマを共有していることを示唆する。ただし、この研究はまだ公刊されていないので、引き続きデータの整理と分析を行ったうえでの公刊を目指している。

(4) パラノイアの生起に関わる2つのモデルについて

さまざまな分析を行ったが、いずれも潜在的自尊心とパラノイアに関連はみられなかった。また、高パラノイア者が低パラノイア者よりも潜在的自尊心が低いという事実は観察されなかった。一方で、一部を除いて、

顕在的自尊心とパラノイアには有意な負の相関がみられ、高パラノイア者の顕在的自尊心は低パラノイア者の顕在的自尊心よりも低かった。これらの結果は、パラノイアにみられるネガティブな主題や感情は、低い顕在的自尊心を単純にそのまま反映したものであると仮定するモデルを支持する。

また、パラノイアと抑うつには強い正の相関がみられた。パラノイアに防衛的な機能を仮定する理論では、パラノイアは顕在的自尊心の低下や抑うつを防いでおり、それゆえパラノイアへの介入は逆効果になると指摘するが、本研究の結果はそのような逆効果は生じないことを示唆している。これは、パラノイアそのものへの介入が必要かつ有用であることを意味する。ただし、本研究は非臨床群を対象とした研究であるため、臨床群に対しても同様の結果が得られるかは定かではない。パラノイアの重症度によってその生起・維持メカニズムが異なる可能性もあるため、引き続き臨床群に対する検討も加える必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- (1) 津田恭充 (2015). 自称謙遜家は実際に謙遜家か, 愛知学泉大学・短期大学紀要, 50, 85-90.
- (2) Kanemoto, K., Tsuda, H., Goji, H., Tadokoro, Y., Oshima, T., Tachimori, H., & DeTofol, B. (2015). Delusional experience awareness gap between patients and treating doctors - Self-reported EPDS questionnaire. *Epilepsy & Behavior*, 51, 60-64.
- (3) 津田恭充 (2015). 曖昧さへの態度とパラノイア 対人社会心理学研究, 15, 71-76.
- (4) 津田恭充 (2014). ネームレター効果の算出アルゴリズムの比較 - 各アルファベットの一般的好意度と個人の反応傾向に着目した分析 - 愛知学泉大学・短期大学紀要, 49, 65-70.

[学会発表](計3件)

- (1) 津田恭充 (2015). パラノイアは自尊心の保護として生じるか 日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, 25.
- (2) 津田恭充 (2013). 奨励賞受賞者講演 非臨床群におけるパラノイア そのメカニズムと心理学的介入方法 日本カウンセリング学会第46回大会発表論文集, 17.
- (3) 津田恭充 (2013). あいまいさへの態度とパラノイア 日本グループ・ダイナミックス学会第60回大会発表論文集,

172-173.

〔その他〕

ホームページ等

<http://hisamit.web.fc2.com/>

6．研究組織

(1)研究代表者

津田恭充 (TSUDA HISAMITSU)

愛知学泉大学・家政学部・講師

研究者番号：80635665